Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-25

夏目漱石「道草」論 : 可能性としての自然主義文学 (小特集 : 漱石論の現在)

木村, 功

(Citation)
國文論叢,55:36-50

(Issue Date)
2020-03-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/E0042055

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0042055

KOBE UNIVERSITY

【小特集】漱石論の現在

夏目漱石「道草」論

――可能性としての自然主義文学――

木村功

一、はじめに

「道草」は、一九一五（大正四）年六月三日～九月一四日に「東京朝日新聞」「大阪朝日新聞」に掲載され、同年一〇月に単行本が岩波書店から刊行された。この年漱石は、自身の人生を回顧する内容の「硝子戸の中」を一月一三日～二月二三日まで三九回に渡って「東京朝日新聞」「大阪朝日新聞」に連載しており、また「道草」に比田夏として登場する異母姉高田房が、漱石の京都滞在中に死去したのも、同年三月下旬の出来事である。「道草」の執筆に向けて、漱石の意識が自ずと過去に向かう状況が醸成されていたといえよう。

発表当時「道草」は、〈漱石先生唯一の自叙伝的傾向を帯びた作品である〉[1]という評価もあるように、漱石の自叙伝小説として迎えられた。その中には、漱石を〈自然主義傍系の巨魁〉と位置付けながら、〈今此の傍系は正系の自然主義を越えて文壇に迎へられつゝある。そして次第に自然主義正系と思はれる程な作品を発表しつゝある。[2]〉と、漱石を自然主義文学の正統と位置付け直す評価さえ表れて来たほどであった。漱石門下では、小宮豊隆が〈（前略）必要なもの一切を盛り込んで、赤裸裸な自分の自叙伝を書いた。さうして漱石は、過去から現在（『道草』に於ける）に亙る自分の行為を、驚くべく冷厳に批評して、現在自分が到達してゐる、心境の高みを示した。[3]〉と評するのに対し、森田草平は〈自分の閲歴をそのまま書かれた〉、〈畢竟当時における日本の自然主義の主張をそのまま踏襲されたにすぎないではないか。[4]〉と批判的に捉えており、評価が分かれた作品である。

これらの「道草」評価の背景にあるのが、事実そのままの描写を主張する当時の自然主義文学の文脈であることはいうまでもない。自然主義文学に対する漱石自身の見解には、〈此間中からして、日本で大分自然派の論が盛になりまして色々の雑誌に其説明抔が沢山出て、私抔も大分利益を受けました。〉（「創作家の態度」「ホトトギス」明治四一年四月）という好意的なコメントがある。一方自然主義文学側からは、例えば小栗風葉から〈氏は余りに術と云ふ事に拘泥し過ぎる。従つて何れの作品の主人公を始め出て来る人間でも、如何にも面白く、如何にも作中の人物らしく拵へ

られ過ぎてゐる。どうかすると一篇の筋の為めに動いてゐる人間――一度誤まると、作家の或る概念に操られてゐるやうな、つまり類性的の人間ばかり出て来るやうな事になる。〉（「予等と路の異れる漱石氏」「中央公論」明治四一年三月）と評されており、これには漱石自身も〈この頃自然派の議論が益々熾となるにつれて、私は到底その派とは相容れないもの、やうに目されて了つた。〉〈自然主義を主張する人は、間接に私を攻撃して居る様に外見上見える。〉と認めながらも、〈何となれば私は自然派が嫌いぢやない。その派の小説も面白いと思ふ。〉（「『坑夫』の作意と自然派伝奇派の交渉」（「文章世界」明治四一年四月）と、自然主義文学に対する好意的な態度を重ねて示していたことは確認しておいて良い。さらに自然主義に対する社会からの批判が強くなってからも、〈自然主義なるものが起つて既に五六年になる。これを口にする人は皆それ〳〵の根拠あつての事と思ふ。わが知る限りに於ては、又わが了解し得たる限りに於ては（了解し得ざる論議は暫く措いて）必ずしも非難すべき点ばかりではない。〉（「イズムの功過」「東京朝日新聞」明治四三年七月二三日）と擁護する姿勢さえ示しているのである。

〈よく知られているように、明治四十年十一月『虞美人草』を書きあげて、『坑夫』にとりかかる直前に書かれたその序文において、漱石は低徊趣味を吹聴して、彼の反自然主義的立場を明らかにしている。〉と述べる平野謙は、漱石を反自然主義と見なす立場から、「道草」についても漱石文学の〈一汚点〉と位置付けたことさえある。[5] その後、「文芸の哲学的基礎」における〈真の一字が現代文芸ことに文学の理想である〉と、自然主義文学への言及に着目した秋山公男は、〈漱石の文学観に即して考えるなら、一般に信じられているほど漱石を反自然主義に位置付ける訳に行かなくなる。漱石は自然主義の本質を「真の理想」を志向する文学として捉えている。そうした観点からするなら、自然主義文学と『道草』の相関については未だ一考の余地が残されているといえるだろう。[6]〉と自然主義文学と「道草」の関係を再検討した。〈漱石と自然主義の関係を、いわば文壇の対極として扱うことが従来の定説のようだが、両者が相方を認めることから文学的出発を迎えたことを忘れてはなるまい〉とする大本泉も、〈もともと真実を志向する自然派の目的と一致していた[7]〉ことを指摘している。

近年の研究でも、漱石と自然主義文学の関係について見直す論考が登場してきている。笹本玲央奈は、「道草」と自然主義の関係を創作手法の観点から問い直し、〈花袋らの方法を見据えつつ、批判的に乗り越えることをめざしたところに「道草」の挑戦があったのではないか[8]〉とする。木村洋も〈漱石の表現意識が自然主義と近接していた〉と想定し〈自然主義と漱石の後期作品群の間の繋がりをいっそう明確にする〉立場から、〈漱石の後期小説が、単に「現実的心理的」傾向という局面だけではなく、厭世家や自殺という題材の選択とその意味づけ方、登場人物の構図（厭世家と青年の師弟関係）などの局面でも自然主義文学に接続する形で生み出されたことがわかる[9]〉と、「こゝろ」を中心に論じた。ただ自然主義文学との関係で漱石の後期小説群を捉え直すのであれば、当時から自然主義文学と比較されることの多い「道草」への言及が十分でないのが惜しまれる。

以上のような先行研究を踏まえ、本論でも自然主義文学との関わりの中で「道草」の意義を再検討したい。当時の自然主義文学を漱石がどのように理解し、翻って自分の文学的立場をどのように考えていたのかを考察することで、「明暗」へと展開していく、「道草」における漱石の創作意識の到達点を明らかにしたい。

二、漱石と自然主義文学

まずは、漱石が自然主義をどのように理解していたのかを確認する。〈日露戦役後に於ける文壇の変転は、極めて急激で、自然主義的思想の作家は、檻を出てた野獣の如き勢を以つて活動しそめたのである。〉（無署名「明治史第七編文芸史」「太陽」明治四二年二月）という証言もある日本の自然主義文学だが、その内容については、例えば〈自然主義の芸術は、平凡醜悪なる人生の事実を表とし、裏に不可測の人生の理想を蔵して、その中に何物かを探り索めしめんとするものである。〉（「平凡醜悪なる事実の価値」「新声」明治四〇年四月）と述べる片上天弦から、〈自然主義の本領は、飽まで現世態の客観的直写にある、之れを客観的に直写して、さて其の上に現れた内容（結果）の本質如何は、此の主義の主張する要目ではない。〉（「自然主義論」「新小説」明治四〇年一一月）と述べる金子築水まで、自然主義文学の在り方を論じる諸評家の文学観に大きな振幅があったことは当時から言及されるところである。[10]

日本の自然主義文学を代表する論客の一人である島村抱月は、「文藝上の自然主義」（「早稲田文学」明治四一年一月）で、日本の自然主義文学を小杉天外を代表とする前期と藤村・独歩を代表とする後期に分け、自然主義の描写の方法・態度を論じて、写実による純客観的描写を採る「本来自然主義」と、作家の主観に基づく説明を採る「印象派自然主義」を掲げて二者の調和を説いた。その上で自然主義の目的としては以下に掲げるように真を重視することを述べ、理想や現実を第二義のものとした。

> 写実主義は現実を写すを目的とするといひ理想主義は理想を写すを目的とするといふ。然るに自然主義はひとり真（Truth）を写すといふ。真といふ語は自然主義の生命でありモツトーである。自然主義から言はすれば、理想といひ現実といふ語はまだ浅い、第二義の役にしか立たぬ。なまなか理想といふが為に、狭隘な個人の選択技巧を自然に加へて、厭悪軽蔑の念を生ぜしめる。なまなか現実といふが為に、外形に拘泥して深奥な自然の味に触れ得ない。此等の上に立つて、第一義の標的となるものは真に外ならぬ。文芸の目的は真を写すにある。（一〇）

この真をめぐっては、漱石も「文芸の哲学的基礎」（「東京朝日新聞」明治四〇年五月四日～六月四日）において、真・善・美・荘厳の四つの文芸上の理想の一つとして掲げている。そして当時の文学の傾向について、〈只真の一字が現代文芸ことに文学の理想である〉とし、〈真を重んずるの結果、真に到着すれば何を書いても構はない事となる。真を発揮するの結果、美を構はない、善を構はない、荘厳を構はない迄はよいが、一歩を超えて真の為めに美を傷つける、善をそこなう、荘厳を踏み潰すとなつては、真派の人は夫れで万歳をあげる気かも知れぬが美党、善党、荘厳党は指を咽て、御尤もと屏息して居る訳には行くまいと思ひま

す。〉と、〈真の一字を偏重視する〉ことを病的現象として批判的に論じていた。加えて漱石は、四理想は一般人間の理想でもあるとして、〈此四面に渉つて尤も高き理想を有して居る文芸家は同時に人間としても尤も高く且つ尤も広き理想を有した人であります。人間として尤も広く且つ高き理想を有した人で始めて他を感化する事が出来るのであります〉と、偉大な人格と技術に基づく還元的感化に言及していく。この時点での漱石は、自然主義文学を真を偏重視する文学として批判的に捉えていたといえるだろう。

しかし、翌年の「創作家の態度」（「ホトトギス」明治四一年四月）では、客観主観の両態度による文学の目的、特性、必要、関係について詳述し、両方の要素の必要性を説く中で、〈今日の文学に客観的態度が必要〉であるとも述べている。客観的叙述は、科学的精神に支えられた観察力が生み出すと考える漱石は、客観的態度に立つ自然派・写実派の文学の特性を〈真を発揮するに存する〉として、真との関係を詳述する[11]。

既に真が目的である以上は好悪の念を取りのけなければなりません。取捨と云ふ事を廃さなくつてはなりません。と云ふと諸君はかう仰しやるかも知れない。真が目的なら真を好むのだらう、よし好まない迄も、偽を悪む訳だらう。真を取り偽を棄てるのは自然の数ぢやないか。成程さうであります。然し文字の上でこそ真偽はありますが、非我の世界、即ち自然の事相には真偽はありません。（中略）だから大千世界の事実は、既に其事実たるの点に於て悉く真なのであります。此事実は真だから好きだ、此事実は偽だから嫌だと、どうしても取捨は出来ない訳であります。（中略）して見ると、真を写す文字程公平なものはない。一視同仁の態度で、忌憚なく容赦なく押して行くべき筈のものであります。（中略）既に公平無私の立場でありますから、問題の撰択がない。撰択がないと云ふのは、意識界に落つるものが悉く焦点になつて仕舞ふと云ふ訳ではありません。意識界のどの部分も比較的自由に焦点になり得ると云ふ意味であります。（中略）だからもう一つ言葉を換えて云ふと叙述すべき事相に自己の評価を与へて優劣の差別をつけないと云ふ事にもなります。

漱石は、〈自然の事相には真偽は〉なく、世界の事実が〈事実たるの点に於て悉く真〉である以上、〈真を本位として筆をとる以上は好悪の念を挟む余地がない〉、それゆえ〈叙述すべき事相に自己の評価を与へて優劣の差別をつけない〉と、自然派・写実派の文学が客観的態度を採ることを解説している。以下、漱石の述べたことを当時の自然主義の評論と比較してみたい。

例えば「所謂余裕派小説の価値」（「太陽」明治四一年三月）で、漱石が説いた小説の余裕派・非余裕派を批判した長谷川天渓「自然派に対する誤解」（「太陽」明治四一年四月）は、〈現実其の物の描写を目的とするのであるから、自然主義の作物には、脚色なるものは無い。これが其の一特色だ。〉とし、〈自然主義の作家は、勉めて脚色の結構を避けむとする。脚色を設くるは、恰も論文を草するやうのもので、始めから結論、即ち結尾が出来上つてゐるのであるが、自然派は其の結末を予定せぬ〉。ゆえに〈結構なく、改造なく、毫も彫琢を施さぬから、現実其のまゝが表現される。〉（三　無脚色）と述べている。

自然の世界の全てが真と見なされる以上、自己の評価を加え差

別化する姿勢を排する漱石と、作家が脚色を加えることなく現実その物を描写する必要を説く長谷川天渓の主張は、表現は異なるものの、立場を同じくする人間の言説と言っても良い程類似している。後で見るように漱石は、日本の自然主義文学作品については批判的だが、自然主義における真実（事実）・現実については、自然主義文学の評論家達と同様の理解を示していたのである。

その長谷川天渓は、〈自然派の特色は、何事にも価値を付帯せぬ点に存する。〉ので、理想の事物・人物を描写しても、〈たゞ箇様の思想も現実の一部であると思うて表現するだけで、其れが優等であるとか或は神聖であるとか、非凡であるとか、人間本来の面目であるとか思考することは無い。〉とする。〈此の故に、取材の上からのみ自然派を区別するのは誤解である。即ち材料を取扱ふ態度の上から、此の派を他と区別して見ねばならぬ。〉（四　現実と理想と価値）と述べ、あくまで題材を取り扱う態度、すなわち作者の脚色を排し題材をありの儘に描写するのが自然主義の姿勢であるというのが、天渓の主張であった。これに対し、かつて客観的描写の内容については度外視していた金子築水は、以下のように述べている。

客観的態度さへ取れば、必ず人生の真実が描写されると思ふは間違つてゐる。作家の感受性や眼識や人格の相違につれて、其のレンズに写る人生には、おのづから広狭、深浅皮相真実等の相違が有る。其の形式だけは如何に客観的であつても、其の内容即ち作品全体の印象が、僅に人生の皮相に触れたつまらないものであるかぎり、斯かる文芸は、決して強く吾人の感興を引くものではない。極端に言へば、先づ作家の感じた感興其のものが、既に特殊の感受性眼識人格の発現にして、如何に主観の姿を隠さうとしても、其れは到底行はるべき事ではない。故に自然派文芸に相当な価値が有るとすれば、形式上客観的描写が如何に大切であつても之れと並んで、又は遥に之れにまさつて、描写される内容其のもの（作品全体の印象）に特質が無ければならない、（後略）（「文芸と実人生」「中央公論」明治四二年五月）

金子の、形式上の客観描写の大切さを認めると同時に、〈描写される内容其のもの（作品全体の印象）に特質が無ければならない〉ことを重視する指摘は、抱月の説いた「本来自然主義」と「印象派自然主義」の調和を自然主義の極致とする考えと重なる。

この頃自然主義を代表する実作者であった田山花袋「『生』に於ける試み」（「早稲田文学」明治四一年九月）が以下のように述べて、平面描写を主張していたことはよく知られるところである。

（前略）聊かの主観を交へず、結構を加へず、たゞ客観の材料を材料として書き表はすと云ふ遣り方、それをやつて見やうと試みたのです。単に作者の主観を加へないのみならず、客観の事象に対しても少しもその内部に立ち入らず、又人物の内部精神にも立ち入らず、たゞ見たまゝ聴いたまゝ触れたまゝの現象をさながらに描く。云はゞ、平面的描写、それが主眼なのです。現実に於ける自己の経験を、聊かの主観を加へず又内部的説明若くは解剖を加へずに、たゞ見たまゝ聴いたまゝ触れたまゝに描く、さう云ふ風に書かうとするにはおのづからそれは印象的（インプレッシン）にならざるを得ない。随て私の試みた描写の仕方を印象的であるとも云へませう。兎に角、私の主

眼とした所は、現実に於ける自分の経験をただ平面的に描く、そしてその平面的に描かれた事象そのものだけで読者をしておのづから何物をか深く考へさす——そう云ふ風の作がして見たい。

〈たゞ見たまゝ、聴いたまゝ、触れたまゝの現象をさながらに描き、〈平面的に描かれた事象そのものだけで読者をしておのづから何物をか深く考へさす〉平面描写を主張する花袋は、「描写論」（「早稲田文学」明治四四年四月）で、漱石の「門」を以下のように批判する。

（前略）漱石氏の作には、よく作中人物の心理を揣摩して書いてある。そしてそれが作者の想像した一般的類型的の心理で、作中人物の個々の心理でないことがよくある。そして氏はさうした心理は描くが、状態描写（此処から、黙つてゐても作中人物の心理が出て来るのである）には、甚だ力を注いで居ない。細かい雑多紛々が状態を現はす上に於て、非常に有益であるといふことなどは殆ど考へて居られないやうに私には見える。

明らかなように、花袋は対象を平面的に描写すれば、例えば作中人物の心理が見えてくると述べるが、そこにはその人物の持つ特質への着目がない。〈客観的態度さへ取れば、必ず人生の真実が描写されると思ふは間違つてゐる。〉のである。花袋の描写論も、同じ自然主義の看板を掲げながらも、評論家が説く内容とは、立場を異にしていた。むしろ〈描写される内容其のもの（作品全体の印象）に特質が無ければならない〉ことを理解していたのが漱石であったことは、以下のメモ類から伺うことができる。

○General caseは人事上殆んど応用きかず。人事はparticular case ノミ。其particular caseヲ知るものは本人のみ。

小説は此特殊な場合を一般的場合に引き直して見せるもの（ある解釈）。特殊故に刺戟あり、一般故に首肯せらる。（みんなに訴へる事が出来る）（大正四年　断片六五A）

人事の〈特殊な場合〉に着目した漱石は、これを〈知るものは本人のみ〉、つまり個人的なケースを〈一般的場合〉に変換することで、読者への〈刺戟〉と、〈首肯〉されることが可能になると考えていた。また「断片六八A」でも、同趣旨のことを書き留めている。

(2)小説、ノ尤モ有義ナル役目ノ一ツトテ、
particular caseヲGeneral case ニreduceスルコト、
×General caseヲGeneral caseトシテハ陳腐
×particular caseヲparticular caseトシテハ奇怪、
×新らしき刺撃アリテ然モ一般ニappealスル為ニ第一ノ如クスル必要アリ、
×吾人ハeffectノ為ニ然スルノミナラズ、人道ノ為ニ然セザル可ラズ

繰り返し漱石が述べているのが、小説の役割として、「特殊な場合」を一般的場合へ〈引き直して見せる〉ことである。金子築水が〈描写される内容其のもの（作品全体の印象）に特質が無ければならない〉ことを指摘するように、〈特殊な場合〉は漱石作品が、読者に新しい刺激とアピールで〈人道〉に接続するために欠くべからざる要素であった。

漱石のメモが示すモデルとして具体的に想起されるのは、「そ

れから」の主人公である長井代助である。〈代助は独りで考へるたびに、自分は特殊人（オリヂナル）だと思ふ。〉（六）ように〈特殊な場合〉の高等遊民だったが、結局家族から〈「世の中に分らない人間程危険なものはない。何を為るんだか、何を考へてゐるんだか安心が出来ない。」〉（一七）と非難され、〈奇怪〉な人物として排除されてしまった。一方先走って言えば、小宮豊隆に〈『道草』において、個人的なものを通して、一般人間的なものに触れているのである。[12]〉という指摘があるように、「道草」は漱石のいう「特殊な場合」を一般的場合へ〈引き直して見せ〉た小説ということになる。

以上見てきたように、漱石は自然主義文学の側から批判を受けながらも、自然主義文学の客観的真を重視する創作姿勢には理解を示しており、また自然主義文学が真を第一義におく文学であることについても〈科学的精神〉（「創作家の態度」）の観点から必然視していたことが分かる。自然主義文学を名乗る文学者の中でも、自然主義文学の主張内容には距たりがあったが、漱石の自然主義理解は、当時の自然主義文学者の所説と変わる所はなかった。文学作品には浪漫主義や自然主義など、様々な要素が混在すると説く漱石が自然主義者を名乗ることはなかったが、以下に述べるように「道草」を書く時期には自然主義文学へ接近していたのである。

三、「道草」における自然主義

漱石は、「道草」を発表する前に「硝子戸の中」（大正四年）を連載していたが、その末尾に〈懺悔〉に関する記述があることに留意したい。

私は今迄他（ひと）の事と私の事をごちや〳〵に書いた。他の事を書くときには、成る可く相手の迷惑にならないやうにとの掛念があつた。私の身の上を語る時分には、却つて比較的自由な空気の中に呼吸する事が出来た。それでも私はまだ私に対して全く色気を取り除き得る程度に達してゐなかつた。嘘を吐いて世間を欺く程の衒気がないにしても、もつと卑しい所、もつと悪い所、もつと面目を失するやうな自分の欠点を、つい発表しずにしまつた。聖オーガストの懺悔、ルソーの懺悔、オビアムイーターの懺悔、――それをいくら辿つて行つても、本当の事実は人間の力で叙述出来る筈がないと誰かゞ云つた事がある。況して私の書いたものは懺悔ではない。私の罪は、――もしそれを罪と云ひ得るならば、――頗ぶる明るい側からばかり写されてゐただらう。其所にある人は一種の不快を感ずるかも知れない。（後略）（三九）

文中にある「懺悔」という言葉は、文脈上告白とほぼ同義である。片上天弦は〈自己の告白懺悔といふ言葉は、近代文学の重要な特色を言ひ現はすものとして屢々用ゐられる。〉として、〈自己の告白と言ひ懺悔（コンフェッション）といふものには、弱い卑しい自己の包み蔵しのない打ちあけであるといふ以外に、以上に、何かもつと力強いものがなくてはならぬ。何かもつと尊いところがなくてはならぬ。暗い醜い自己の忌憚なき暴露であると同時に、何かもつと明るい美くしいものが潜んでゐなくてはならぬ。〉（「告白と批評と創造と」「文章世界」大正一年一二月）と述べているが、周知のように〈弱い卑しい自己の包み蔵しのない打ちあけ〉という要素

を含む告白は、ルソーの「告白」を意識した猪子蓮太郎の「懺悔録」が認められる島崎藤村「破戒」（明治三九年三月）以降、日本の自然主義文学で重要視された表現方法である。[13] ここで注目したいのは、漱石が自分の身の上を語るに当たって、〈もつと卑しい所、もつと悪い所、もつと面目を失するやうな自分の欠点を、つい発表しずにしまつた〉、〈私の書いたものは）頗ぶる明るい側からばかり写されてゐた〉と述べ、〈私の書いたものは懺悔ではない〉としているが、そこには懺悔（告白）が〈本当の事実〉を叙述する表現方法であると意識していることが窺えることである。つまり、過去を回想するに当たって、その内容の不十分さを認める時に漱石が意識していたのが告白であり、漱石は自然主義文学の表現方法を明らかに意識していたことが分かるのである。

そもそも、告白が装置されている漱石作品は、所謂前期作品よりも、後期作品に認められるところである。「彼岸過迄」の須永、「行人」の一郎、「こゝろ」の先生と一人称の語りが多く認められるのも、そのためである。そして「道草」は、作品の中に告白を設定せず、作品そのものが作者の半生を題材にした「告白」であった。「明暗」が、告白を装置して居ない作品であることを考えると、告白という観点からみた「道草」は漱石文学の画期となる作品であるとも言える。しかもその「道草」の執筆時期の漱石には、告白について大正四年に記したとされる、以下のメモが確認できる。

○或人ハ告白ガイヽト云フ。或人ハ告白ガ悪イトイフ。告白ガイヽノデモ悪イノデモ何デモナイ、人格ノアルモノガ告白ヲスレバ告白ガヨクナリ、シナケレバシナイ方ガヨクナルノデアル。（後略）（断片六八C）

ここで、告白という自己解剖・自己批判の表現手段を用いるにあたって、漱石が〈人格ノアルモノ〉による告白を重視していることに注意したい。自然主義文学も理想を描くことを否定してはいないが、それはあくまで理想そのものをありのままに描くためであって、理想は目的ではなく、真を描くための題材の一つに過ぎない。しかし、漱石は、告白を採用するにあたって、〈人格ノアルモノ〉という「特質」（金子築水）を意識しないわけにはいかなかったのである。

事実を事実として在りの儘を描いたものが、真のナチユラリズムの文学である、自己解剖、自己批判、の傾向が段々と人心の間に広まりつつあり、精神が極めて平民的に、換言すれば平凡的になつて来たのであります。人間の人間らしい所の写実をするのが自然主義の特徴で、ローマン主義の人間以上自己以上、殆んど望んで得べからざる程の人物理想を描いたのに対して極めて通常のものを其儘、其儘と云ふ所に重きを置いて世態をありの儘に欠点も、弱点も、表裏共に、一元にあらぬ二元以上に亘つて実際を描き出すのであります。

（中略）

さて斯く自然主義の道徳文学の為めに、自己改良の念が浅く向上渇仰の動機が薄くなるといふことは必ずあるに相違ない、是は慥に欠点であります。

従つて現代の教育の傾向、文学の潮流が、自然主義的である為めに、ボツボツ其の弊害が表れて、日本の自然主義と云ふ言辞は甚だしく卑しむ可きものになつて来た。けれども是

は間違である、自然主義はソンナ非倫理的なものでは無い、自然主義其ものは日本の文学の一部に表はれた様なものでは無く、単に彼等は其の欠点のみを示したのである、前にも言つた通り如何に文学と雖も決して倫理範囲を脱して居るものではなく、少なくも、倫理的渇仰の念を何所にか萌さしめなければならぬものであります。

人間の心の底に永久に、ローマン主義の英雄崇拝的情緒的の傾向の存する限り、此心は永存するものであるが、夫を全く無視して、人間の弱点許りを示すのは、文学としての真価を有するものでない、片輪な出来損いの芸術であります。如何に人間の弱点を書いたものでも、其の弱点の全体を読む内に何処にか之に対する悪感とか、或は別に倫理的の要求とかが読者の心に萌え出づる様な文学で無ければならぬ。之が人心の自然の要求で、芸術も亦此の範囲にある、今の一部の小説が人に嫌はれるは、自然主義其ものの欠点で無く取扱ふ同派の文学者の失敗で、畢竟過去の極端なるローマン主義の反動であります。（後略）（「教育と文芸」明治四四年六月一八日、長野県会議事院、後「信濃教育」明治四四年七月）（傍線引用者）

自己解剖、自己批判の傾向が人々の間に広まり標準となる中で、自然主義文学は〈人間の人間らしい所の写実をする〉文学と漱石は述べる。しかし人間の弱点ばかりを描く日本の自然主義文学の一部は文学の真価を有するものではなく、〈取扱う同派の文学者の失敗〉であると批判し、人間の弱点に対する悪感や倫理的要求を読者の心に生じさせることが文学に必要であると説いている。明らかなように、漱石がいう告白における「人格」とは、〈倫理的の要求〉を喚起する特質を指す。ここには、依然偉大なる人格と技術に基づく還元的感化を主張した頃の漱石の姿が髣髴としている。そのように理解すると、漱石が徳田秋声の作品を〈書きつぱなしのやう〉と、辛辣な評価を下していることも理解できるのである。

つまり徳田氏の作物は現実其儘を書いて居るが、其裏にフイロソフイーがない。尤も現実其物がフイロソフイーなら、それまでゞあるが、眼の前に見せられた材料を圧搾する時は、かう云ふフイロソフイーになるといふ様な点は認める事が出来ぬ。（中略）始めから或るアイデアがあつて、それに当て嵌めて行くやうな書き方では、不自然の物とならうが、事実其の儘を書いて、それが或るアイデアに自然に帰着して行くと云ふやうなものが、所謂深さのある作物であると考へる。徳田氏にはこれがない。（「文壇のこのごろ」「大阪朝日新聞」大正四年一〇月一一日）

漱石は、現実・事実そのままを書く場合でも、それが自然に〈フィロソフィー〉（アイデア）に帰着する必要があると説いており、ここに自然主義文学を評価する一方で、日本の自然主義文学を批判する漱石独自の立ち位置を指摘することができるだろう。かくして漱石が「道草」において、現実・事実を踏まえて、どのような〈フイロソフイー〉を書いたのかが、次の問題になってくる。

その問題を検討する前に、「道草」の世界を構成する語りの視点の問題に言及しておきたい。平野謙に、〈すこし注意して読め

ば、健三はこう考えた、しかし、お住はこう思った、という並列的な描写が実におおい[14]〉との指摘があるが、語りの機能的な役割については相原和邦による先駆的な研究に続いて、秋山公男が後期三部作と「道草」の視点の在り方を比較検討し、語り手が作中人物の内外両面を遍く照射する絶対的視点を持ち、視点人物の健三を始めとする作中人物が相対化される、〈絶対的視点による相対叙法[15]〉を指摘している。金子明雄は、〈このテクストに一人称回想体的な要素が潜在し、それを想定する読みによって読解可能となる部分が多いことは確か〉とし〈三人称回想小説[16]〉とした。前掲笹本論文も、「道草」で多元的視点が導入され、〈語りの視点が一人物の内面から他の人物へと瞬時に転換される〉ことで、〈「道草」では、相互の異なる認識が繰り返し対置され、一人物の論理の相対性を浮かび上がらせることに力点が置かれている[17]〉と述べる。いずれの論においても、「道草」の語りに相対的視点の存在を認めているように、登場人物たちが相対化されることは「道草」の表現上の特徴である。具体的には、健三や御住といった登場人物たちが互いを相対化するだけでなく、語り手からも二人は相対化される。語り手による相対化の例としては、以下のようなものがある。

健三は座を立つた細君の後姿を腹立たしさうに見送つた。彼は論理の権威で自己を伴つてゐる事には丸で気が付かなかつた。（一〇）

事々について出て来る権柄づくな夫の態度は、彼女に取つて決して心持の好いものではなかつた。何故もう少し打ち解けて呉れないのかといふ気が、絶えず彼女の胸の奥に働らいた。其癖夫を打ち解けさせる天分も技倆も自分に充分具へてゐないといふ事実には全く無頓着であつた。（一四）

さらには、登場人物たちから見下される島田平吉と健三の面会場面において、語り手が間接話法を用いて、健三自身が自分を相対化している事例も確認できる。

「彼は斯うして老いた」

島田の一生を煎じ詰めたやうな一句を眼の前に味はつた健三は、自分は果して何うして老ゆるのだらうかと考へた。彼は神といふ言葉が嫌であつた。然し其時の彼の心にはたしかに神といふ言葉が出た。さうして、若し其神が神の眼で自分の一生を通して見たならば、此強慾な老人の一生と大した変りはないかも知れないといふ気が強くした。（四八）

田中邦夫に、〈『道草』の語り手の立脚点は死との対比によってうまれる「生」そのものに価値を認める境地、――人間のうちにある「温かい情愛」に眼を注ぎ、自己と他者との同質性や対等性を認識する視点――にある[18]〉との指摘があるが、この場面も健三自身の感懐を通じて、〈自己と他者との同質性や対等性〉が読者に印象づけられる場面である。言い換えれば、主人公の健三を含めて「道草」の登場人物がいずれも相対化されることで、個々の人生も〈大した変りはないかも知れない〉というテーマが、読者に提示されるのである。そして、個々の人生が〈大した変りはないかも知れない〉という、人生を対等視するような語り手の位置を導くのが、相対性を演出する「道草」の叙法であることはいうまでもない。

このように「道草」は、作者漱石の自叙伝的小説ということか

ら、告白という自然主義文学の方法を採用し、現在の作者の認識を語り手に仮託し、視点人物である健三には作者の過去の生活経験を投影させることで、告白の内容を二層化して構成している。同時に、その健三を中心に据えながら多元的視点の下で、記述される情報量の偏りはあるものの、登場人物たちを対等に描出しようとした作品であるといえよう。しかしここまでであれば、花袋の説く描写論と大差はない。

自分と元養父島田の一生を〈大した変りはないかも知れない〉と語る健三の感懐は、後で述べる「道草」独自の〈フイロソフイー〉である「片付かない」という認識へと接続していく。そもそもこの〈フイロソフイー〉は、「硝子戸の中」に〈継続中〉という表現ですでに登場していたものである。[19]

客の帰つたあとで私はまた考へた。――継続中のものは恐らく私の病気ばかりではないだらう。私の説明を聞いて、笑談だと思つて笑ふ人、解らないで黙つてゐる人、同情の念に駆られて気の毒らしい顔をする人、――凡て是等の人の心の奥には、私の知らない、又自分達さへ気の付かない、継続中のものがいくらでも潜んでゐるのではなからうか。もし彼等の胸に響くやうな大きな音で、それが一度に破裂したら、彼等は果して何う思ふだらう。（中略）所詮我々は自分で夢の間に製造した爆裂弾を、思ひ〳〵に抱きながら、一人残らず、死といふ遠い所へ、談笑しつゝ歩いて行くのではなからうか。唯どんなものを抱いてゐるのか、他も知らず自分も知らないので、仕合せなんだらう。（三〇）

漱石は、自分の療養体験を通じて得た〈継続中〉という考えを、見舞いに訪れた人々の中にも適用して〈継続中〉という人生上の問題として敷衍して見せたのである。そしてそれは「道草」の健三においては、自分とその係累間の〈血と肉と歴史〉の問題として、語り手を通じて紹介される。

彼は又彼の細君の事を考へた。其当時強烈であつた彼女の歇私的里（ヒステリー）は、自然と軽くなつた今でも、彼の胸に猶暗い不安の影を投げて已まなかつた。彼はまた其細君の里の事を考へた。経済上の圧迫が家庭を襲はうとしてゐるらしい気配が、船に乗つた時の鈍い動揺を彼の精神に与へる種となつた。

彼はまた自分の姉と兄と、それから島田の事も一所に纏めて考へなければならなかつた。凡てが頽廃の影であり凋落の色であるうちに、血と肉と歴史とで結び付けられた自分をも併せて考へなければならなかつた。（二四）

接続詞「また」を繰り返し使うことで、家族・親族に抱く健三の不安が蓄積していく様が描かれるが、それら〈頽廃の影であり凋落の色〉の中に、〈血と肉と歴史とで結び付けられた自分〉も位置付けられるという認識が登場してきている。特に島田が出入りするようになってからの〈彼は其間に時々己れの追憶を辿るべく余儀なくされた。〉が、〈彼は自分の生命を両断しやうと試みた。すると綺麗に切り棄てられべき筈の過去が、却つて自分を追掛けて来た。〉（三八）と、過去から逃れられない健三の心象が語られる。島田を巡る夫婦の会話でも、健三は〈「世の中にはたゞ面倒臭い位な単純な理由で已める事の出来ないものが幾何でもあるさ」〉（五二）と御住に告げ、その御住との間の軋轢が昂じた夏には、〈斯うした夏中の出来事を自分丈で繰り返して見るたびに、

彼は不愉快になつた。是が何時迄続くのだらうかと考へたりした。〉（五五）のである。

作品中で繰り返される、こうした〈血と肉と歴史〉〈已める事のできないもの〉〈何時迄続くのだらうか〉は、作品後半で「片付かない」という認識へと収斂していく。[20] 三女となる新たな家族を迎えた時、健三は以下の感想を漏らす。

「人間の運命は中々片付かないもんだな」

細君には夫の言葉があまりに突然過ぎた。さうして其意味が解らなかつた。

（中略）

彼の心のうちには死なない細君と、丈夫な赤ん坊の外に、免職にならうとしてならずにゐる兄の事があつた。喘息で斃れやうとして未だ斃れずにゐる姉の事があつた。新らしい位地が手に入るやうでまだ手に入らない細君の父の事があつた。その他島田の事も御常の事もあつた。さうして自分と是等の人々との関係が皆なまだ片付かずにゐるといふ事もあつた。

（八二）

健三の連想は、赤ん坊の三女から、御住、兄・姉・義父・島田・御常を通して、健三を中心とする人間達の関係が〈片付かずにゐる〉と認識される。そしてこの認識は、「道草」の最後でも再提示されることで、漱石の〈フイロソフイー〉の在処を読者に明示しているのである。

「まあ好かつた。あの人だけは是で片が付いて」

細君は安心したと云はぬばかりの表情を見せた。

（中略）

「安心するかね」

「えゝ安心よ。すつかり片付いちやつたんですもの」

「まだ中々片付きやしないよ」

「何うして」

「片付いたのは上部丈ぢやないか。だから御前は形式張つた女だといふんだ」

細君の顔には不審と反抗の色が見えた。

「ぢや何うすれば本当に片付くんです」

「世の中に片付くなんてものは殆んどありやしない。一遍起つた事は何時迄も続くのさ。たゞ色々な形に変るから他にも自分にも解らなくなる丈の事さ」

健三の口調は吐き出す様に苦々しかつた。細君は黙つて赤ん坊を抱き上げた。

「お、好い子だ〳〵。御父さまの仰やる事は何だかちつとも分りやしないわね」

細君は斯う云ひ云ひ、幾度か赤い頬に接吻した。（一〇二）

相原和邦に〈（前略）「片付」かなさにまつわる個所は、作者の健三に対する『道草』特有の批判辞（木村注・反措定叙法のこと）が皆無である事実が示すように、いずれも例外なく健三と作者とが一致し、健三の主張がそのまま大正四年の作者の主張として脈うっている場面に他ならないのである。[21]〉との指摘があるが、注意すべきは健三の言葉で作品世界が結着するのではなく、御住が赤ん坊を抱き上げて、〈「御父さまの仰やる事は何だかちつとも分りやしないわね」〉と、健三の言葉を打ち消したところで、作品世界が閉じられていることであろう。

〈「世の中に片付くなんてものは殆んどありやしない」〉という健三の感懐が、御住によって相対化される構図によって、一見健三中心で展開されていた作品世界とその〈フイロソフイー〉は無意味化されたように見える。しかし、健三に対して赤ん坊を抱いた御住という対立軸の存在が改めて示されたことは、ここでも健三と御住の人生は〈大した変りはないかも知れない〉という対等な構図が示されたことを意味しており、健三のいう人間関係が「片付かない」問題は依然続くことが読者へ強く印象づけられる結末になっている[22]。健三の主張は、大正四年の作者の主張として脈打っているというよりも、「道草」の語りが〈大正四年の作者の主張〉も、相対化して見せたのである。

そしてこれこそが、対等ゆえに「片付かない」個々の対立を物語る「明暗」の語りの基本構造が、明確に提示された場面であったといえよう。

四、まとめ

「道草」（大正四年六月）の発表は、文学史的に見れば白樺派や耽美派文学が登場し、日本の自然主義文学が既に文学思潮としての退潮期にある中でのことであった。漱石自身は自然主義文学に対しては好意的であったが、自ら認めるように日本の自然主義文学からは批判される立場にあり、「虞美人草」（明治四〇年）発表当時は〈作者は現実の事実そのものを描き現はす上には肉薄的ならぬ所謂余裕のある態度をとつてゐるが、フィロソフィイングが多く断定的で、明快巧緻の趣きに富むだけに、この作が与ふる中心の印象は、作者の談義を聴くといふ感である。〉（片上天弦「『虞美人草』、『緑髪』、『鶏頭』」「早稲田文学」明治四一年三月）と批判されるほどであった。その漱石は、述べてきたように明治に入って科学的精神が広がり、人々が自己解剖、自己批判をするようになった現代において、客観的な真を求める姿勢を具備した自然主義文学を評価しながら、その一方で人間の弱点を対象にする日本の自然主義文学については批判的であった。そして、読者の倫理的欲求に応える〈フィロソフィー〉を備える必要性を主張していたのである。

「硝子戸の中」（大正四年一月）の中で、〈継続中〉という認識に言及した漱石は、続く「道草」においてその認識を発展させ、主人公健三とその係累の人間関係を通して、人間の生の様々な「片付かない」諸相を作品の中に刻印した。その〈フィロソフィー〉の表現方法として、告白という自然主義文学の表現方法を採用し、現在の作者の認識を語り手に仮託し、視点人物である健三には作者の過去の生活経験を投影させることで、告白の内容を二層化して構成した。同時に、その健三を中心に据えながら多元的視点の下で、登場人物たちを対等に描出しようとしたのである。この点に「明暗」に接続する表現方法の獲得があったと考えられる。

明治時代に入って科学的精神に支えられた客観的叙述の必要性に留意した漱石が、客観的事実を重視する自然主義文学を評価していたことは明らかである。しかし、日本の自然主義文学との関係においてはお互いの評価は芳しいものではなかった。そのため漱石は、反自然主義の作家と見なされることになったが、それは漱石の所説を誤解したものである。漱石は日本の自然主義文学の

方法を採用しつつ、〈フィロソフィー〉を自分の文学作品の根幹に配置することによって、日本の自然主義文学とは異なるもう一つの自然主義文学の可能性を示していたと言えよう。

注

（1）赤木桁平『夏目漱石』（一九一七年、新潮社。のち、二〇一五年一二月一〇日、講談社学術文庫、一九四、一九五頁）

（2）加藤朝鳥「夏目漱石論」（『早稲田文学』大正六年一月一日）

（3）小宮豊隆『夏目漱石』（一九三八年七月一日、岩波書店、八三八頁）

（4）森田草平『夏目漱石　三』（一九八〇年八月一〇日、講談社学術文庫、三七六、三七七頁）

（5）平野　謙「夏目漱石」（『芸術と実生活』二〇〇一年一一月一六日、岩波現代文庫、二七四頁）

（6）秋山公男「『道草』―構想と方法」（『文学』一九八二年四月、のち『漱石文学論考―後期作品の方法と構造』一九八二年一一月一〇日、桜楓社、二五六頁）

（7）大本　泉「自然主義」（『夏目漱石事典』一九九〇年七月一〇日、學燈社、一五六頁、一五七頁）

（8）笹本玲央奈「「道草」の手法と自然主義―語りの視点と人物造形をめぐって」（『国語と国文学』第九〇巻第九号、二〇一三年九月一日）

（9）木村　洋『文学熱の時代』（二〇一五年一一月一〇日、名古屋大学出版会、二八七頁）

（10）金子築水は、「自然主義論の色分け」（『太陽』明治四三年七月）で、自然主義のグループを、花袋・天渓の〈徹底的自然主義論〉、抱月・「早稲田文学」グループの〈温和的自然主義論〉、漱石・帝大出身の評論家の〈自然主義的非自然論〉を挙げ、他にもさまざまな自然主義論があると紹介している。

（11）注（6）で秋山公男は、〈「真」を描き「事実」を重視しようとする自然主義文学への漱石の評価は、明治四十四年に至って飛躍的に前進を見せている。「文芸と道徳」（明44・8・18、於大阪市公会堂）にそれが窺われる。〉と述べるが、本論では「創作家の態度」の時期と考えている。

（12）小宮豊隆「解説」（『道草』昭和一七年七月、岩波文庫、三一五頁）

（13）漱石が「破戒」を評価していたことはよく知られている。また正宗白鳥『自然主義文学盛衰史』（昭和二六年、創元文庫）は、「破戒」が出版されて間もない頃、上野精養軒で会合があり、漱石と藤村も出席していた。漱石が参会者を通じて藤村に紹介を求めたが、藤村が断ったという噂を伝えている。

（14）注（5）に同じ、二七六頁。

（15）注（6）に同じ、二六八頁。

（16）金子明雄「三人称回想小説としての『道草』」（『漱石研究』第四号、一九九五年五月二〇日）

（17）注（8）に同じ。

（18）田中邦夫「『道草』の語り手」（『漱石から漱石へ』二〇〇〇年五月八日、翰林書房、一七〇頁）

（19）古川久も、「人間の運命は中々片付かない」について、〈また『硝子戸の中』（中略）に記されている「継続中」の考えも、これと同じ意味である〉（『注解』『漱石全集』第六巻、昭和四一年五月二三日、岩波書店、六三五頁上）と、「継続中」と「人間の運命は中々片付かない」が同義であることを指摘している。

（20）引用した用例以外の「片付かない」使用例は、健三が採点をする場面の〈「何時迄経つたつて片付きやしない」〉（九四）がある。

（21）相原和邦『漱石文学』（一九八〇年七月一〇日、塙書房、一九四頁）

（22）重松泰雄に、〈（前略）果てしのない円形軌道の上をめぐり続ける両者に、本来勝利も敗北もありうるはずはあるまい。〉（『漱石その新たなる地平』一九九七年五月一五日、おうふう、七〇頁）との指摘がある。

附記　「道草」を含む漱石の著作物の引用は、『漱石全集』（第二次刊行、二〇〇二年四月～二〇〇四年九月、岩波書店）に依った。引用に際して、特殊なものを別として、ルビを廃した。

（きむら　たくみ／岡山大学大学院教育学研究科）